

令和5年度第1回岡山市総合教育会議

日時：令和5年8月29日（火）

場所：市庁舎 第3会議室

午後3時28分 開会

○司会 では、定刻となりましたので、ただいまから令和5年度第1回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、全員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長 いいですね。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 どうぞ。

○司会 では、傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしく願いいたします。

○市長 はい。それでは、次第に沿って議事を進めます。

本日は、「やる気につながる好奇心の醸成」に向けた取組について、そして育む5つの力の基礎となる学力の向上に向けた取組について報告をしていただき、それらを踏まえて、今後の課題や取組の方向性などについて議論していきたいと考えております。

ちなみに、学校現場における取組、ご提案など、幅広いご意見をいただくため、岡山市中学校長会の溝手会長、岡山市小学校長会の平井会長にもご出席をいただいております。

2名の方々にも、この会議の議論に加わっていただきたいと思っております。

それでは、意見聴取者の方に自己紹介をお願いしたいと思います。まずは、溝手会長、よろしく願いいたします。

○溝手中学校長会長 失礼いたします。中学校長会長、岡山市立高松中学校長の溝手でございます。こういう会議に参加することに非常に不慣れでございまして、学校現場でいろいろ起こっていること、事務局にもいたことがあるのですが、そういう中で今現場で起こっていること、現場で何か取り組んでいることをお話しできる機会があればと思っております。

ます。よろしくお願いいたします。

○市長 ありがとうございます。

それでは引き続きまして、平井会長、よろしくお願いいたします。

○平井小学校長会長 失礼します。小学校長会長、芳泉小学校長の平井でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

このたび、学校指導課とともに学力向上について議論をさせていただいたこと、とてもありがたかったです。これをいかに学校現場に広げていくか、そういう話ができばうれしいなと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○市長 総合教育会議で様々な議論をいたしますけれども、それを実践するのは学校側になると思います。校長さんをはじめとして、各教職員の皆さま方があって初めて子どもたちが成長するんだと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、議事に入ります。

まずは、協議事項1、「やる気につながる好奇心の醸成」に向けた取組について、教育長から説明をお願いします。

○教育長 はい。まずは、今回協議事項として「やる気につながる好奇心の醸成」に向けた取組についてを取り上げていただき、ありがとうございます。

説明に入ります。

資料1をご覧ください。

この資料は、「やる気につながる好奇心の醸成」に取り組む経緯と令和5年度の取組について示しております。

資料左側のグラフをご覧ください。

昨年度、岡山市が独自で行っている教育に関する総合調査の結果から、子どもの学校生活における充実感や達成感が低下していることが分かりました。これはコロナ禍において学習活動や学校行事などが制限されたことが影響し、子どもにとっては学ぶ意欲につながりにくかった状況であると推察しております。この状況の改善に向け、他者との関わりや体験機会の充実を図っていくため、令和5年度から「やる気につながる好奇心の醸成」に重点的に取り組んでいきます。

このことについては、昨年度の第3回総合教育会議でもご協議いただきました。子どもの好奇心を育み、やる気につなげていくには、学校の取組だけではなく、家庭や地域の協力も欠かせないことから、子どもの体験活動の充実、家庭教育に関する支援、教員の指導

力の向上の3点で整理しました。

まず1点目は、主に地域での取組を支援するため、社会教育施設を中心に子どもが体験できるような環境を整備したり、参加型のイベントなどを計画したりしています。具体的には、めだかの学校に高い解像度のカメラと展示解説システムを導入し、めだかの体のつくりなどを館内はもちろん、インターネットでも観察ができるようにしています。オリエンタル美術館に情報可視化ツールを導入し、館内でもインターネットでも作品等の検索を容易に行えるようにします。そして、千足古墳については、もう既に一般公開が始まりました。市長も私も最初の日には訪れましたが、親子連れが多数おられまして、コロナ禍が明けてイベントに親子連れで参加してくれるのが一番ありがたい気がしております。

2点目は、主に家庭での子どもへのよい声かけ、働きかけの広がりを目的としております。保護者が参加する講演会や研修会へのアドバイザー派遣、家庭で取り組むべきことなどをまとめたリーフレットの配布、関係団体等と協力した参加・体験型のイベントを開催し、子育てに関する情報提供や相談機会の提供を行います。

最後に、主に学校での取組として、これからの授業の在り方を示した授業改善資料を作成し、今年度の4月に既に配付したところでございます。様々な研修の機会や中学校区の保育・授業研究会の指導助言等を通して、内容の浸透を図っていきます。また、子どもが力を発揮できる学級づくりを進めるために、既に作成、配付した人間関係づくりに関する資料を活用した研修を実施していきます。

これらの取組により、子どもの好奇心を刺激し、学ぶ意欲につなげていくことで、子どもたちの学校生活における充実感や達成感を高め、第2期教育大綱で目指す5つの力を育成していきたいと考えております。

説明は以上です。ご協議、よろしくお願いたします。

○市長 ありがとうございます。

それぞれお話を聞く前に、この折れ線グラフですけど、これ、全国の数字はあるのですか。

○教育長 あります。全国がこれです。手持ちで、全国の数値を私は持っているのですが、全般的に全国よりは小学校も中学校も学校に行くのが楽しいと答えた子どもは岡山市では多いです。令和5年度の速報値でいくと、小学校は全国と同じぐらいで、中学校は3ポイントほど高い状況です。

○市長 これはオープン資料ですね。

○教育長 オープンです。

○市長 どなたかにコピーしていただいて皆さんにお配りするということができますか。

○教育長 可能です。

○市長 それでは、全国との平均は後で委員の皆さま方にもお配りをして、その比較でまたご議論いただきたいと思いますが、取りあえず校長会のお二人に肌感覚での学校での実態みたいなものをお話いただければありがたいなと思いますが、よろしいでしょうか。

○溝手中学校長会長 失礼いたします。今、教育長が言われたように、少しコロナ禍で学校に行くのが楽しいという子どもの数、本校でももうほんの僅かですけど、下がったかなというような感覚を持っています。

それから、肌感覚も含めてなんですけど、本年度取組を始めたばかりのこともございますが、地域の人や物を多く活用させていただき、いろんなことでやる気につながる好奇心をだんだん子どもたちに醸成していければいいなと思っています。

まだ期間が短いものがあって完全に全てを把握はしていませんが、例えば本校では、今コロナ禍でもありますが、千足古墳とか、もちろん造山古墳、ビジターセンターを訪問する機会をつくったり、それから城址も新しい資料館を造っていただいたりして、本校だけの話になっているんですけど、子どもたちがそういうところで、地域の地域のことを学ぶということで、いろいろやる気につながり、さらに学校に行くのが楽しいと感じているのではないかなと考えています。

○市長 ありがとうございます。

それでは、平井さん、お願いします。

○平井小学校長会長 小学校では、多くの学校が造山古墳に見学に行きます。6年生が行くんですね。ちょうど春に社会科で古墳時代を勉強する頃に造山古墳に行きます。そこで地域の方に古墳について説明をしていただいたり、地域の古墳を保存している方々の熱い思いを聞くことで勉強に熱が入ったり、「よし、勉強してみよう」という思いになるということが多くの学校でなされています。

さらに、夢についてファジアーノ岡山の選手に来ていただいて今頑張っていることを聞いたり、私の前任校では、今ここにおられる石井委員さんに来ていただいて、夢を語っていただいて、子どもたちが目を輝かせたというような、経験もあったりして、そういうことが子どもたちの「やる気につながる好奇心」につながると実感しております。

○市長 ありがとうございます。

学校に行くのが楽しいという資料のこれは上半分の話ですよ、その比較はね。

○教育長 この学力・学習状況調査については、ご存じのとおり、小6と中3のみということになりますので、総合調査では全小1から小6、中1から中3となります。部分的なことにはなりますが、全国と比べているのは、これしかないというところですよ。小学校の数値は見てのとおり、大体全国並で推移しています。中学校のほうが令和5年度3ポイントほど上がっているんで、全国と比較すれば、中学校は学校へ行くのが楽しいという子が増えていると見とれます。

○市長 全国レベルから見ると、学校に行くのが嫌になっているという感じではないと。

○教育長 そうですね。そう読み取れます。

○市長 あと、この「学校の授業が分かりやすく楽しい」というか、分かりやすいというのが、特に中学校でぐんと落ちているんですけど、何か中学校長会でこういったことを感じるようなことはありますでしょうか。

○溝手中学校長会長 コロナ禍で話合いの活動などが少し時間が少なくなった、ということを感じています。2人で話したり4人で話したり6人で話したりして、いろいろ課題を解決していくようなことがあるんですけど、そういうことがコロナ禍になって少し減ったかなと。今、大分回復はしてきていると思うので、またこの数値も変わってくるかなと思います。

○市長 そうでなくても中学校になると授業も難しくなるし、それが今おっしゃったようにグループでの討議とか、そういうのが欠けてくると分かりづらくなっていくというのが出てくると。納得できるような話かなとも思います。

この「やる気につながる好奇心の醸成」、これらについて委員の皆さん方、ないしは校長さん方、教育長もどんどん議論に入っていて結構ですが、特に教育委員の皆さん方から1人ずつご意見をいただければと思います。どなたからでも結構ですが、石井さんからどうですかね。

○石井教育委員 ご説明と状況のお話、ありがとうございます。私が感じましたのは、コロナで少し数値が低下しているというのはあるんですけども、今回子どもの好奇心を醸成するというのは、この指標を見るとコロナの前の数値よりもさらに高い目標値になっているということからも含めて、コロナの前までに戻せばいいんだということではないと理解しましたし、コロナの前にできてたこと、そのコロナの間できなかったことがあって、コロナの後にもう一回それをやればいいんだということではなくて、そもそもこの子ども

の好奇心というのはすごい大事なもので、それをより高めていく必要があるんだということ強く感じさせていただきました。

その中で、特にこの3つ、大きく記載されてるんですけども、子どもの接触頻度ということを考えれば、家庭と教員というところが頻度としては大きいのかなと思っているんですけども、その中で変えられる要素が強いのは、やっぱりその3番目のところの先生方の子どもとのつながりの部分が特に影響度が大きいし、変えていける、よりよくできるところではないかなと感じております。

そうしたときに、具体的な取組というのも大事だと思うんですけども、何でこの子どもの好奇心が大事なのかということとか、その子どもの好奇心を醸成するとどういうふうになっていくのかということを中心に本当に一人一人の先生方が知っていただいて、それを基に動いていただくというのが非常に大事なのではないかなと感じました。

○市長 ありがとうございます。

では、片山さん、お願いできますか。

○片山教育委員 私もお話を伺わせていただいて、コロナ禍ということで学校に行くということから行きたくても行けない状況があったりとか、あと体の状況があって行くことを控えられるお子さんもある中で、少しポイントとしては下がりながらも、先生方がその理由をしっかりと捉えようとしてくださっているということが、家族としても子どもたちにしても心強いのではないかなという気がします。

一人一人をしっかり見取ってくださるということが……。

○市長 一人一人……。

○片山教育長 一人を見取る。理解をしてくださるという、そういう一人一人への思いというのを一人一人が受け取る。集団生活の中で、なかなか全体に指示が行く中で、自分事として聞くとか先生が自分のことをどんなふうに思ってくれてるだろうというのは、なかなか届きにくい部分があるかと思しますので、そういった部分で一人一人に声かけとかなどをしていただけるというのは、非常に子どもにとっては心強いだろうし、うちの子なんかも、もう帰ってきて、今日先生がこんなふうに言ってくださったとか。あと、子どもとか、その子どものお友達の話を聞くと、先生方が指導力の向上というところで個人個人の学力とか好奇心、子どもたちが一生懸命やっていることとか意欲を持って取り組もうとしている姿を個別に声かけをしてくださっているとすごく感じます。

さっき先生の影響力は非常に大きいと石井委員がおっしゃったかと思うんですけど、私

もまさにそんなところがあるなということと、それから丁寧に、うちの娘が行っている学校でも学期ごとにフリートークの時間を設けてくださって、通学路の一緒のお子さんと一緒に先生と話をする機会を設けてくださって、子どもの心を見える化するような取組をお忙しい中でも本当に積極的にしてくださっているところというのが、子どものやる気とか学校に行くということの何か楽しさにつながっているなということをおもいました。

子どもの体験活動の充実のところなんですけれども、出かけていくとか地域の方とつながっていくというところで、すごく取組を豊かにしてくださってるなと思うんですけれども、あと一点、先日の外部評価委員の方からも指摘があったのは、英語の力という意味で、せっかくこれだけICTというか、1人1台端末があって、ボタン一つで世界とつながれる。せっかく岡山市にも姉妹都市とかあるので、何か期待としては、そういったところの学校とうまくつながりながら、子どもたちが海外と直接的につながっていけるような体験活動というのをもっと増やしていただけると、子どもたちのさらなる、それこそ夢とか希望とか好奇心というのも広く湧いていくんじゃないかなと思いました。

○市長 ありがとうございます。

それでは、上西さん、お願いいたします。

○上西教育委員 先ほど校長先生のお二方からもあったんですが、体験ですね。いろんなところに行ってみるとか、いろんな経営者の方とかスポーツ選手とか、いろんな方の話を聞くとか、そういうことは非常に重要かなと思っていて、なかなか時間的な限界もありますけども、そういう機会を子どもには実体験として経験させてあげたいなと思っています。

ただ、時間的なこともあって、日々できることは何かと考えたら、やはり授業とか朝の会から始まるのだろうと思うんですけども、学校の先生がどういう形で朝を迎えて一日を始めるかと。私は子どもがいて、朝、御飯を食べた後、学校へ行くまでの間、情報番組を見たりしていて、子どもからどんどん質問が来ます。最近だったら原発って何なんだとか台風はどこに行くんだとか、うまく答えられないんですが。そういったニュースを見ているだけでも、子どもは次々質問をしてくるということで、子どもはもともと好奇心があるんだろうと私は思っていて、そういった時事情報でも何でもいいんですけど、そういったところを少し導入として使うとかして、少し子どもが興味を持っているところから授業を始めていくみたいな工夫を少しでもしていただけると、ただ教科書を学ぶというだけではなくて、少し興味を持って勉強に臨んでもらえるのかなと思っています。

○市長 ちなみに上西さんのお子さんは何歳なんですか。

○上西教育委員 上が中1で下が小5です。小5のほうが特にやっぱり聞いてきますね。

○市長 小5のほう聞いてくる。

○上西教育委員 そうですね。多分個性もあるんだろうと思うんですけども、本を見ても漫画を見てもニュースを見ても、多いですね。余談ですけど、最近は何か異世界漫画みたいなのがはやっているらしくて、最近聞かれたのは男爵と伯爵と公爵、どれが偉いんだと聞かれたんですけど、私は答えられなかった。中世のヨーロッパの本を調べました。

○市長 ありがとうございます。

じゃあ、河内さん、お願いします。

○河内教育委員 この「やる気につながる好奇心の醸成」というのが大綱に整合性を持って位置づけられたことによって、目指す子どもの姿である、自らの個性を磨き、選択と挑戦を繰り返すことができる子どもの育成には、やる気とか好奇心とかエンジンといますか、原動力というか、そういうものが大切に育てられないといけないということが明確になって、やるべきことがはっきりしてきたと、見えてきたと感じています。

この資料の1の左のグラフからも、なぜ今「やる気につながる好奇心」なのかという必要性も見とれます。それからまた、右の表、地域、家庭、それから学校、もう子どもを取り巻く全てのところで好奇心を育てていかないといけないというのも、ずっと入ってくる感じがして、とてもすっきりとやろうということの要点が見えてきたなと感じています。

今後のことなんですけど、やる気につながる好奇心というのが育っているか、育っていないのかということを検証していかなければならないと思います。ただ、この「やる気につながる好奇心」というのは、見えない学力であって数値化できないものです。この表の裏返しではないんですけども、じゃあ「学校に行くのが楽しい」とか「学校の授業は分かりやすく楽しい」と答えた子どものこの割合の数値に変えて検証していくというか、評価していくということもあるのかなとは思うんですけども。

ただ、例えばめだかの学校であれば、めだかの学校という施設で、より子どもたちの目が輝くようにするにはどうしたらいいかということを追いかけて改善していく。それから、家庭も何か子どもたちがやる気になるようなことを求めていくと。せめて学校では授業の中でやる気をこのようにして育てて、好奇心をこうして育てていったら、こんな見える学力につながっていったという成果の見える化といいますか、そういうものが今後できていけばいいなというふうに感じています。

○市長 今の教育委員の皆さん方のご意見に対して、校長さんとか教育長、またほかの教育委員会のメンバーでも結構ですんで、何か。もちろん総務局のメンバーでも結構ですから、何かあればお願いします。

○平井小学校長会長 失礼します。授業の中でやる気につながる好奇心、子どものほうから見ると、やってみたいとか考えたいというようなことになってこようかと思います。そのために授業のスタートが大事だと思っています。授業のスタートの部分をいかに工夫して、子どもたちがやってみたいとか考えたいと思えるような授業の導入部分ができるか。そして、子どもたちが自分でめあてを立てて、こんなことをやってみたいんだとか、こんなことを考えたいんだ、そういう授業になっていく必要があるかと思っています。

本校では、今、全ての教員が授業の全体公開というのをやってるんですけども、その中の一つとして授業の最初の部分を工夫しようということを言っております。そういった中で、ほかの職員から、「ここはもっとこうしたほうがいいんじゃないの」とか、私のほうからも、「それはよかったね」とか、「ここをもうちょっとこうやったら授業が、子どもたちがやってみたいと思えるようになるよ」とか、そういうようなアドバイスをしたりしながら授業の最初のところを考えています。

○市長 どうでしょうか、中学校長会。

○溝手中学校長会長 体験活動の充実、なかなか見える化を具体的にというのはどうかなと思って、例えば造山古墳とか千足古墳のことであれば、熊本から石を運んできているとかいうことで、生徒は何で熊本から石を運んできているんだろうなとすぐに疑問になると思うんです。どういうつながりがあるんだろうということを地域の方からお話をしていただけなので、そうしたらそれがいろんな学び、深い学びなどにつながり、じゃあそこからもっと歴史を学んでみようとか、それから水攻めであれば、何で秀吉はそんなすぐ近畿地方に帰れたんだろうとか、あるいはそんな情報をどこから得たんだろうとか、あるいはもっと言うと、こんな堤防を何日かで築いたんだろうとか。堤防の跡地は、何でこんなことができたんだろうとか戦国時代の歴史というのは、子どもの中ですぐにつながってくると思うんです。

うちはそういう地の利があるので、そういう地域のリソースをどんどん活用して、それを成果につなげたいなと思ってるし、実際に今本校ではそういうことが起こっているなと感じています。

○市長 教育委員会、よろしいですか。

○島田教育次長 教育次長でございます。

今お話をお伺いしていく中で、本当にコロナによって体験というのが減っているということ、それから片山委員さんがおっしゃられたようにネットの活用というのが大変充実してきている中で、一方でインターネットの情報では知っているけれども、実際には、例えば聴いたことがない虫の声であったりとか、あるいはこれから稲穂の実がなってこうべを垂れるわけですけれども、そういった様子は知らない。ただ、見たことはないけど、ネットでは知っている。そのあたりを充実させていくことによって、好奇心が増してくる。そうすることによって学習意欲も高まってやる気につながっていき、こうしてお示させていただいている、学校に行くのが楽しいであるとか授業が分かって面白いとか、そういった数値が指標になって、我々としては見ていく必要があるのかなと、そのように感じています。

○市長 ちょっと私が気になったところは、片山さんのおっしゃった心に見える化しようという話と、河内さんも多分同じ議論だと思うんですが、成果に見える化していく。もちろん見える化して、それを表していくと、必ずしも実態と合わないところもあるかもしれない。でも、そういったことをやるのが子どもたちにとって、また先生にとっても重要なんじゃないかなという気がします。平井さんがおっしゃったように、それはもう先生が一人一人の子どもたちのためにいろいろとアドバイスしたり、そういう心の通った、そういうものが重要であることはもちろんなんですけど、そういうできるだけマクロでまずは捉えてみるというか、そういった議論があって、あとはミクロの一人一人の話をしていく。

今日のこの資料もある面マクロの資料であり、これ、心に見える化でもあると思うんですが、それをどういうふうにブレイクダウンしたものをつくっていくのかというのは、今日の大きな提案の一つかなという気がするんですが、それらについてももう少し掘り下げた話があれば教えていただければと思うんですけど。

○河内教育委員 ありがとうございます。授業の中で先生方は度々子どもの様子を見て小さな評価をしたいと思います、「分かってるかな、分かってないかな。」途中で回ってみて、ノートを見て、どれぐらいの子どもが分かってるとか分かってないとか評価して、次に、分かってない子が多いから、ここをこういうふうに投げかけてみて話し合わせてみようかなという評価はするけれども、子どもたちがものすごく食いついてきてるなとか、目を輝かせて何かすごく好奇心旺盛な様子をしているかなという評価はあまりしないと思う

んですね。

でも、そういう評価をして、食いついてきてる、ふだんはしゃべらない子が今日は手を挙げて発言しているとか、グループの中でしっかりいろいろ自分の思いを話しているとか、そういう評価をして、じゃあそれがもっともっと気持ちが高まっていくためには、どんなことをここで活動して子どもたちに投げかけていったら、もっと子どもたちがしっかりと興味をもつだろうかということを考えて工夫して、最後にこれだけ食いついたら、こんな深い学びができているというのをノートを見て評価し、そういうことを繰り返していくと、つまり「やる気につながる好奇心」で子どもたちを見ていくと、その目で見ていって評価して、今日はどれくらい深い学びができたかなという学びの深さに結びつけていくということはできるのかなと思いました。

○市長 なるほどね。

○教育長 いいですか。

○市長 はい、どうぞ。

○教育長 河内委員が言われたとおりで、今年度配っているリーフレットには、授業が終わった後の振り返りをしっかりして、自分が何で考えが変わったかとか誰の意見で意見を変えたとか、いろんなことを振り返ることで自分の見える化につながっているのかなと思うんです。その取組状況を市長が言われるように総合的に評価していって、次どうするかというのは、また見ていかないといけないと思うんですが、今のところ学校指導課のほうは振り返りを今重要だと考え、進めているので、そのことはまたご報告できたらと思います。

○市長 私自身は今の提案というか、非常に新鮮なものを感じたところがあって、もう既にいろんなことをやられているのかもしれないんですけども、一度また次の回とか、教育委員会としてできるものを考えていただければありがたいという気がいたします。

ちなみに、好奇心でいくと、溝手さんがおっしゃった千足古墳、造山古墳に関しては、私も好奇心をどんどんそそられて、熊本とおっしゃったんですけど、阿蘇と天草というと、阿蘇と天草って結構離れてますよね。何でそれができるんだろう。遠くから持ってこさせるだけの力があったということになるけども、何で阿蘇と天草なんだろうとなると国造というか、当時の行政の長を指名する権限を持っていたということも出てくる。なぜ持ってたんだろうというようなことから入っていくと、結構面白くて、私も好奇心をそそられて、どんどんどんどんやっているとところもあるんですが、余計なことを申し上げました。

何か教育委員会のほうで締めることがあれば、(1)で。

よろしいですか。

じゃあ、取りあえずその次に行きたいと思います。

では、協議事項(2)育む5つの力の基礎となる学力の向上に向けた取組、よろしくお願
いいたします。教育長から説明をお願いします。

○教育長 はい。続きまして、教育大綱で育む5つの力の基礎となる学力の向上に向けた
取組について、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた分析と今後の取組についてご説
明いたします。

資料2、1ページをご覧ください。

教育大綱策定前から、これまでの学力の状況をまとめたものです。

右のオレンジ色の部分が令和3年から令和7年の第2期大綱の取組についてでありま
す。これからの予測困難な時代を生きていく子どもたちに必要な力として定めた育む5つ
の力のうち、学力の向上に係る活用力、表現力、向上力に関連する目標と現在の達成状況
を示しております。

達成状況と調査結果の分析については3ページになりますが、参考資料の1の表やグラ
フと併せてご覧ください。

指標としている全国学力・学習状況調査の偏差値は50以上であり、目標を達成していま
す。記述式問題の正答率の対全国比は1以上であり、目標を達成しています。探求的な学
習をしている児童・生徒の割合は全国平均レベルを下回り、目標を達成できておりませ
ん。

こういった調査結果から、記述式問題の正答率が全国平均レベル以上となったことにつ
いて、各学校で理由などを加えて自分の考えを書くことを授業で取り組んできた成果と考
えております。その一方で、無解答率が高いこと、小学校算数で基礎的な力に課題がある
こと、また情報を収集し、考えをまとめて発表するといった探求的な学習が十分でないこ
とは課題と捉えます。

そこで、先ほど平井会長からもお話がありました。今年度は教育委員会と本日参加い
ただいております校長会長のお二人と岡山大学の先生方とも協議をいたしまして、学校の
実際の授業や子どもの姿とも照らし合わせながら、これからの時代を生きる力を育むとい
う視点で課題を明らかにしてまいりました。後ほどの協議の中で両校長からもお話しいた
だきたいと思いますが、私のほうからは概要を説明いたします。

まず、どのような問題につまずきが見られたか、参考資料を使って説明いたします。

4 ページの参考資料 2 をご覧ください。

これは小学校 6 年生の算数の問題です。3 つの厚さのファイルを人数分、棚に並べることができるといった生活場面によくある状況を問題にしたものです。解答の状況を分析すると、式は分かるが、正しい答えを出せない児童が一定数いることが分かりました。他の計算問題と比べましたが、小数の計算の段階でつまずきがあることが見えてきました。算数に課題が見られた今年度の 5 年生についても、昨年度の 4 年生の段階から全国平均との差があり、その差は残念ながら今年度さらに開いた状況になっております。

続いて、5 ページ、6 ページの参考資料 3 をご覧ください。

これは中学校 3 年生国語の問題です。生活の中によくある横書き、縦書き、様々な形式の文章から内容を読み取り、考えを述べる問題です。6 ページの左側に示していますとおり、正答率は高いものの、無解答率が高い状態でした。社会の中では、こうした多様な資料を組み合わせで考えたり、課題解決に向けて意見を求められたりする場面は多くあります。社会人になった子どもたちが、そのような場面で今回の調査の無解答のように何も発言することができないということにならないように、必要な力をつけていかなければと確認をいたしました。

これらの分析から、2 ページにある 4 点、基礎基本の確実な定着、計算の意味理解、問題場面や何を問われるかの把握、複数の情報から必要な情報を取り出して考えを表現することを岡山市の課題としてまとめました。そして、課題に対する具体的な取組として、3 点示しました。これらは教育委員会、学校、大学の共同で取り組んでいきたいと考えています。

1 つ目は、苦手の克服など、一人一人の課題に合わせた学習に向けた ICT の活用です。2 つ目は、基礎基本を身に付けるための問題や基礎基本を活用する力を付けるための良問の提供です。3 つ目は、授業の共同研究です。子どもたちに必要な力を育成するためには、何より授業の充実が必要です。どのような授業が岡山市の子どもの課題解決につながるかといった視点で、教育委員会、学校、大学と共同で研究し、市内の学校へ広げていくことを計画しています。そして、これらの授業改善の方向性を先生方と共通理解を図るため、教育委員会から情報発信や研修の充実に努めます。

以上の取組に対して、下にある 3 つの指標を設けております。全ての学校で振り返りを実施すること、無解答率を全国平均以下にすること、子どもたちが ICT を活用する授業

を実施することです。残念ながらICTを活用する授業については非常に低い数値が今出ておりますので、ここについても重点的に取り組む必要があると考えております。

これら3つの指標を高めることで、1ページに示しております第2期大綱の学力に係る3つの目標を達成し、激しく変化する社会の中で一人一人が個性を磨き、様々な場面で選択と挑戦を繰り返すことができるよう取り組んでいきたいと考えております。

説明は以上です。よろしくお願いいたします。

○市長 ありがとうございました。

少し補足になるのかも分かんないんですけど、第1期の大綱と第2期の大綱の根本的な哲学の違いを少し申し上げたいと思っております。実は当初学力をチェックしたところ、岡山市、私の記憶が間違いでなければ、国語の偏差値が48というのがありましたよね。中学校でね。48というと、都道府県政令市をずっと見て最低の都市でありました。別に偏差値を上げるための教育をやる必要はないというのは、みんなそう思っはいるんですけども、それにしても常識的な基礎知識、基礎学力というのか、それがあまりに欠けてるんじゃないかということを考えてわけです。70万も市民がいて、子どもたちが他の地域とそんなに差があるわけがない。じゃあ、何が原因なんだろうということを随分当時の教育長、教育委員の皆さん方と相談しました。

結論は、若い先生方が多い、その授業に自信が持ててないんじゃないかという話になり、校長さんも毎日授業を見てくださいと。若い先生が自信を持ってないということであれば、おのずと分かるだろうと。それは校長さんとよく話をしてくださいと。そして、教育委員会の方も定期的に学校に行ってくださいと。そうやって若い先生たちの授業レベルを励まし合おうということをさせていただきました。そうこうしているうちに、目標値の全国平均並み、大きく言えば、全国平均には達した。あつという間に達した。となると、もう原因は一言でいうと授業にあったということが明確になっていったわけでありす。

もう基礎学力というか、基礎知識はここで付いたと。ここから我々が子どもたちを育てる上で何が一番重要かというのが2期の大綱の議論であったわけでありす。そうなること、変化の多いこの時代に子どもたちがこれから人生において何回か失敗するかもしれない。でも、失敗しても粘り強く人生を切り開いてもらおうじゃないか、そして考える力をもとうじゃないかということで、第2期の大綱の議論が出来上がったというところでありす。

この資料の2の目標の最初なんですけど、全国平均レベル以上の学力というのは、これ、

残したんですね。これ、どうして残したかという、もう必要ないという意見、どちらかというとも私もそういう意見だったんですが、校長会でこの話を議論された。この今のレベル以上ということを書いとかなないと元気が出ないという校長さんの意見もあって、そこが教育に意欲をずっと燃やしている方の一つの考え方として、そういうことをおっしゃるんだとしたら、そこは残そうじゃないかと。しかしながら、これはわざと定量的に幾つ伸ばそうというようなことは一切書いていないというところが、ここはみそで、全国的な学力という基礎は我々もっていようじゃないかと。

そして、次のプラスアルファとして出てくるのは、今言ったように考える能力、そして失敗を恐れない能力、失敗してもくじけない能力、そういったことにしていこうということをおの場で、石井さんはいたような気がしますね。片山さんもおられたような気がしますけども、こういった整理をさせていただいたということでもあります。だからといって、この50以上のものが達成、未達成というのは大きなものはあると思いますが、重要なのは、子どもたちがこれから人生を切り開いていくときに必要な力を身に付けさせるというところにポイントがあるということをご承知をいただきたいと思います。

余計なことを申し上げましたけれども、そこが我々の心の根っこの部分だということでありまして、今、教育長が説明をされた資料に関して、校長会のお二人から肌感覚をまた教えていただければと思います。

○溝手中学校長会長 失礼いたします。中学校は、参考資料3にある国語の問題で、正答率が比較的高いのに無解答率が高い。この問題を見て、国語の教員とも話を私させてもらったんですけど、うちの学校の、こういう形式の問題にまず慣れていないということがあったり、だから良問に当たっていかないといけなかなと。特に学習指導要領にのっとったような、問題だと思しますので、しっかり慣れていくことが必要でないかと思ひます。

それからあとは、教員の授業力アップというのは、どうしても欠かせないと思ひます。私も授業を見に週に2回、時にはもっとたくさん行ってアドバイスもしてるんですけど、子どもが輝く学びづくりプロジェクトというのを学校指導課がやってくさっていて、そういう中で教員の授業力がかなりアップしたかなというやうな気がします。

お互いに同じ中学校ですから、同じ教科の先生が集まって、どんな授業の組立てをするかとか振り返りをどうするかというやうなこと、単元も学年も違ったりするんですけど、最後まで粘り強く取り組めるやうな指導をしっかりしていこうというやうなことを校内でも、やっていく必要があるかなということも感じましたし、実際に授業力が上がっている

ので、この全国平均レベル以上の成績も取れたのかなというようなことも話の中で出てきていました。

今後この動きは本校の中でも続けていって、しっかり研修を積んで、授業力アップ、特に若い先生が大変増えておりますので、私がアドバイスする、プラス同じ教科の先生がアドバイスをするともっといいものになるかなということも思っております、今後継続していきたいなと思っております。

○市長 ありがとうございます。

○平井小学校長会長 それでは、私からは小数に限ってお話をさせていただきます。小数の授業を行った後に小学校では定期テストというのをやるんですけども、その結果を学年の教員に聞いてみました。そうすると、あまり悪くないんですね。どうしてかなというようなところを学校指導課としっかりお話をさせていただきました。そういう中で、時間がたつと忘れてるんじゃないかというようなこと。それはなぜかということ、小数の計算の意味が理解できていないんじゃないか。意味が理解できてないので、時間がたつにつれて忘れてくるんじゃないかということ。それから、繰り返しの計算をあまりやってないんじゃないかなというような話が出てきました。

一つは、先ほど溝手校長も言われたように、授業の中でしっかり意味が分かるような授業をしていかないと子どもたちに考え方が定着しない。考え方が定着をしていると、そうそう忘れるものではないんじゃないかなと思いますので、まずは一つはいい授業をするということ。

それからもう一つは、繰り返しの練習をしていくということも大切です。小数の前に四則計算、足し算とか引き算とか掛け算、割り算でつまづいている子どもも当然います。その前のところでもつまづいている子どもたちもいますので、例えば朝の朝学習というのを小学校も中学校もやっているんですけども、そこでデジタルドリルなどを使っています。AIが入っているデジタルドリルですと、自分の苦手なところまで戻れるんです。そういうドリルを使って自分の苦手なところから朝の時間に勉強をしていく。そのデジタルドリルというのは自動的に採点をしてくれますので、教員が苦手な子どもに積極的に関わることができるんですね。そういうものを使いながら繰り返し学習をすると、苦手な子どもにとっても小数ってこんなもんなんだなというようなところが次第に分かるようになるんじゃないかなと思っているところです。

それからもう一つは、授業をどうやってレベルをアップしていくかということなんです

けれども、全ての教員が授業を公開するという、みんなに見てもらう授業をすることが大切だと考えています。それはなぜかという、我々もそうですけれども、人に授業を見てもらおうと思うと一生懸命授業の内容を考えるわけです。そういうところを繰り返しやっていくことで授業力というのはかなり高まってきますし、周りの職員からいろいろなアドバイスをもらえたりする中で自分の授業も高まっていったり、実際に画像や動画を使って、このところはよかったねという褒められることで、子どもと一緒にすけれども、さらにやろうという職員の意欲が増えますし、そういう取組も大切なんじゃないかなと思っています。

○市長 AIを活用するって、これ、皆さんやってる話なんですか。

○平井小学校長会長 やっている学校もあって、近くの学校では朝学習で全ての子どもがAIを取り入れたデジタルドリルをやっております。

○市長 面白いですね。ありがとうございました。

委員の皆さん方、どうぞご意見を言ってください。

じゃあ、逆周りでいきますか。

○河内教育委員 今日ご提示くださった資料を見させていただいて私が一番に感じたことは、大綱で目指している、自らの個性を磨き、選択と挑戦を繰り返すことができる子どもの育成には、これは探求的な学習をしているということがこれがすごく重要なことだと思ったんですが、残念ながらこの資料の1ページにもあるように、その部分が未達成だということです。

参考資料の1の左のほうの四角囲い5の質問紙調査で、「自分の考えがうまく伝わるよう、話の組立てなどを工夫して発表した」とか、それから「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりできている」という質問に対して、子どもが自ら答えている。その回答に肯定的な回答の割合が低いということが一致していて、子どもたち自身も自分はできていないと自覚しているんだなということのを思いました。

この探求的な学習というのは、やる気とか好奇心とか、そこに直結するものであって、探求的な学習を通して、「分かった」とか、「これをもっと調べたい」とか「面白い」とか感じたことがどんどん好奇心を高めて、知的好奇心というか、どんどん高めていくものになるのではないかなということで、ここが非常に残念だなど。それで、1ページの右の一番下の情報収集をし、考えをまとめて発表する学習が十分でないというところへつながっていくんだなと思いました。

これはまさに授業改善の問題に係ってくる問題で、授業改善をしないといけないということにつながっていくんだと思うんですけども、今回、全国学力・学習状況調査の結果だけでなく、岡山っ子アセスの結果が2年間分示されたことによって、何がどの学年でつまづいているのかが具体的になって、一層この結果を見て授業改善というのが進みやすくなったのではないかなと思います。加えて、今年度計画してくださっている提案授業の共同研究が今後大きな意味を持つことになると期待しています。

○市長 これも非常にポイントを突いてるような気がいたしますが、特に参考資料1の(5)では中学校が低いんですけど、中学校校長会として何かコメントがあれば。

○溝手中学校長会長 話を組み立ててとか筋道を立てて考えるとかということが苦手な子が多いのかなと思います。なかなかそこへ行くまでが大変なのかなというか、言い方が不十分で不適切かもしれませんが、動機づけがすごく大事だなと思っていて、しっかりそういう動機づけ、「勉強して面白かった」とか「楽しかった」とかいうことを特に探求的な学習の中で取り入れていけばいいのではないかなということを考えています。校長会としても、そういうことはまた話題にして取り組んでいきたいと思っています。

○市長 教育委員会のほうで何かありますか。

○島田教育次長 今、溝手校長先生がおっしゃられたとおりで、めあてであるとか、あるいは当面振り返りというのを教育委員会としてはしっかりやっていこうと。その中で工夫していくことによって、めあても、ただ単にこれを学ぶということではなくて、好奇心というか、やる気につながるような、そういうめあてを工夫すること。例えば、今日の授業は内容的に知的好奇心をというのもあるし、子ども同士で最後、自分たちの学んだことがきちんと説明できるようにしていくようにしようというようなめあてにするなどして、子どもたちが話し合う場面をつくることのできたりとか、あるいは探求的な気持ちを、授業そして単元の中でもち続けてすることもできるのではないかなと思っています。

そして、今年度振り返りに力を入れていこうと教育委員会は思っているわけですけども、自分たちの学びについて振り返りを通して、さらにそうした気持ちを高めていくということを取り組んでまいりたいと思っております。

○市長 私としては、これは、例えば話の組立てなどを工夫して発表するというのは、人間ってまねてだんだんと向上していくというのがあるんで、先生がこれをできないと、なかなか子どもに伝わっていかないんじゃないかなと。だから、全体の俯瞰力を持ち、そして一つ一つ精緻に物を見ていく。そして、今後の流れを見ていくという。よくこういう話

の中には、基本的な話し方みたいなのがありますよね。そういうものを先生がずっとやってれば、子どもには伝わっていくんじゃないかなというような気もいたしますが、またよろしく願いいたします。

それでは、上西さん、お願いできますか。

○上西教育委員 冒頭で市長から説明いただいた、第1期の大綱と第2期の大綱では、哲学というか、目指すところが違うんだということで、そのことを再認識させていただきまして、第2期で考える力であるとか、くじけない力とか、そういうものを重視しているということは非常に素晴らしいことかなと思いました。

その観点からすると、調査結果で記述式問題の正答率がいいというところは非常に素晴らしいことかなと思いましたが、一方で無解答率が高いというのはちょっと引っかかるころがあって、先ほど中学校長会の先生から国語の問題で、少し見慣れない問題だったかなみたいに言われたと思うんですけども、まさに見慣れない角度から聞かれたときに、そこを引かずにぐっと入って行って捉えていく力こそが考える力であって、くじけない力であるかなと私は思っていて、そこをこれはまた慣れなのかもしれませんが、先ほど良問という話がありましたけど、いろんな角度のちょっと見慣れない問題にも当たってみて、そこで何が聞かれているのかを読み解くとか聞かれている内容をちゃんと捉えることができる力を付けてもらえたらなと思いますし、良問を考えていくという方向性はいいことかなと思いました。

○市長 おっしゃるとおりで、テストで反映できるかできないかという問題じゃなくて、人生生きていく上で、いつも同じことが繰り返されるわけじゃないんで、そういったときにどう反応していくか。小学校、中学校のうちからできてる必要は必ずしもないのかもしれないけど、それを繰り返しやることによって、よりよくなっていくということになることは間違いないと思うんですが、今の上西さんの指摘に対して何かございましたら、また教育委員会も含めてですけど、よろしいですか。

○教育長 そうですね。

○溝手中学校長会長 そのとおりだと思います。

○市長 なかなかもう答えようがないぐらいのところ、植山さんとか指導課長とか何か、ずっとこの問題をやってる方から何か反省の弁を含めて。

○事務局 植山でございます。初めて校長先生方と分析のところから一緒に考えさせていただく中で、無解答って何だろうという話は出ました。それで、数値から見ても、最終的

に時間がなかったのか、分からなかったのか、諦めたのか、どうなんだという、いろんなパターンを考えながら話をしたんですけども、校長先生方にお伺いすると、学校の中で見ると回答した子どもたちと子どもたちの顔が結びつくので、「この子はこれ、分からなかったから回答ができなかったんだな」というようなことは分かるんですけど、数値から見たらなかなか見えにくかったというところはございました。

ただ、その中で、分からないから最初から諦めたのではないというような、数値だけから見ると時間がなくなってできなかったという数値が少なかったかなと思うんです。一生懸命解くんだけど、結果として問題の意味が理解できなくて、無解答になった子どものほうが岡山市の場合は多かったのかなという気はします。ただ、そこは最終的な分析まではできておりません。

無解答も校長先生方とお話をする中で、今も私、指名をされていますが、社会の中で無言で済むということは、社会の中で生きていく中ではほとんどないと思っております。できればしゃべりたくないというのが私もあるんですけども、ただ意見を求められたら、やっぱり自分の考えを伝えるというのは大切なことであると。それができる子どもを育てていきたいというのは、校長先生とも、それから大学の先生とも話をした中身でございます。

○市長 今の無解答の意味を探るってすごいですね。そういう議論って今回初めてあったと思うんですけど、だから時間がなくてやったのではない。だから、トライしようと思ったけど、問題の意味が分からない。だから、問題の意味が分からないから書きようがない。そういう意味ですよ。となると、今度は問題が分からないというのをどうやって改善していくかということになるんですかね。でも、そういう分析は素晴らしいと思いますので、よろしく願いいたします。

それでは、片山さん。

○片山教育委員 私も何か今の全体のお話を伺っていて、第1期の大綱から第2期の大綱に向けて、子どもたちの着実な成長とか力が付いてきているということを土台にしながら次の段階へ進めていただいているということもよく分かりましたし、それから学力に関しても、いろいろ分析をしていただきながら次につながるよというということで、着実に子どもたちの成長の姿が数値の中に表れてきているのではないかなという気がしました。その一方で、「やる気につながる好奇心」というところで、子ども自身もさっきの無解答率のこともあると思うんですけども、やればできるという自分の自信だとか効力感といいます

か、きっとやればできるはず、そのやればできるという自分に対する期待感というのは、やったらできたという過去の経験というのがすごく大きいと思うんです。

なので、いずれにしても自分がやったことを自分なりにも着実に自分はやったんだとか、できなかったけれども、ここまでは分かったんだとか、その振り返りの中で自分の立ち位置だったり、年齢が低いと難しいと思うんですけども、徐々に学年進行とともに、中学校3年生を卒業する頃には自分で自分を振り返って自分には何が足りないのかとか、自分はどうしたらいいのかとか、何かそういう自己課題を明確にして取り組んでいけるような力が最終的に育っていくと、好奇心という、自分はこういうことに関心があるとか、自分はこういうことが好きだとか得意だとか、自分の個性とかも理解しながらチャレンジする。やってみたら、きっとできるかもしれないとか、できなくても友達に少し相談をすとか先生方に相談すとか、何かしらそういうツールを持ちながら自分なりに邁進していく自己学習力みたいなものが付いていってくれるとありがたいなと思います。

記憶が違っていたら申し訳ないんですけども、岡山市の学力調査のほうで、家庭での学習時間というのが多分小学校1年生から6年生にかけて下がって行って、中学校1年生でもあまり、6年生から1年生がちょっと上がって、また2年生で落ちて、受験期にちょっと上がるというような家庭での学習時間というものの調査が小学校の場合は年齢が低いほど高いというのがあって、多分そこはおうちの方がドリルなんかをチェックするから割とちゃんと取り組む。だけど、そこからだんだん親が見なくなって自分に任されるとサボっちゃうとか、うちの子もそうだと思うんですけども。

何かそのあたりで自分が知りたいとかやりたいとか、やればできるという、そういう積み重ねというのが、最終的にはこれからもいろんな課題にぶつかったときに自分でチャレンジしていくような何かそういう力につながっていくんじゃないかなと思うと、その学習という経験を通して、人生の中で自分が初めて出会うような試練に対しても、学習で培った自分に対する自信だとか取り組んでやれた体験というものが何か汎用できればありがたいなということをちょっと思ったりしました。

○市長 本当ですよ。自信を持つというのは、どんな子どもでも、子どもだけじゃなくて、大人でも自信を持って行動できれば、随分変わりますよね。その自信という視点ではどうでしょうか、校長会。

○平井小学校長会長 もうまさに自信をもつということは、すごい大切なことだと思います。授業の中で子どもたちが自分の考えをどれだけ伝えられるか。自分の考えをもって友

達と話せるか。その中で自分の言ったことがみんなに認められたり、友達から称賛されたり、そういう場面をたくさんつくっていく必要があると思うんですね。小学校の授業では1つの課題に対して1つの答えを出すという授業が多いんですけども、そうでなくて、これからの世の中では幾つかの課題を併せて読み取って、それを自分なりに解釈して話をしていく必要があるということをこの前の分析の会でもお話をさせていただきましたし、社長に、「君、これどう思うね」と言われたときに、「分かりません」とか、「さあ」というのはないよねという。そのために、今委員さんが言われたように、自信を持って発言できるような子どもたちを育てていきたいと思っています。

○教育長 1個、いいですか。

○市長 はい、どうぞ。

○教育長 今の件で、参考資料の1の(5)番に「先生はよいところを認めてくれる」というのは岡山市はいいんですね。「自分には、よいところがあると思う」も岡山市は数字が高いんですよ。これって今思ったんですけど、授業中と授業中以外、どっちの場面かなと思ったときに、授業中以外の場面が多いのかなと。だから、これから授業改善の中で技術的な問題ではないけど、授業の中でしっかり生徒を褒めましょうというのは言ってもいいのではないかと思います。

○溝手中学校長会長 いろいろな場面で生徒が活躍する場面があるんですけど、確かに今言われたように、授業の中でこれは君の意見はすばらしいとかいうようなことは、少ないかもしれません。確かに自分の反省でもあるんですけど、そういうところもあるのかなということを感じています。

○教育長 授業レベルでいったほうがいいな。

○溝手中学校長会長 今おっしゃられたことは、ありがたいと思います。

○市長 ありがとうございます。

それは私でも、例えばいろんな案件がありますよね。それで、いろんな場で、例えば記者会見、議会、そういう発言をして本当によかったかなと思うことって結構あるんですよ。ただ、秘書課の面々で今日よかったですよと言われると、ほっとするという、それが自信になるというような。子どもたちというのは、だから先生がどういうふう一言声をかけてくれるかというのは、むちゃくちゃ大きいと思いますよ。私も先生の言葉というのは幾つかのことを覚えてます。多分みんな、そうなんじゃないですかね。だから、そこで先生がどう評価をするのか。評価というか、一言褒めてあげると、よくやったじゃない

って。失敗したと思ってるかもしれない。それがよくやってるじゃないかと言うと、それが自信につながって、いい相乗効果をもたらすんじゃないかなというように思います。

ごめんなさい。石井さん、お待たせしました。最初と最後というのも申し訳ないんですけど。

○石井教育委員 失礼します。学力の向上に向けて岡山市の考え方、第2期の大綱の中で好奇心を醸成すること、そのこと自体が学力の向上につながっていくという考え方になってると思いますので、まずその好奇心を醸成すること自体がすごく大事なのかなと改めて感じてます。

そのときに若干気になるのは、この偏差値、特に小学校で47に近づきつつあるというのは若干気になると思うんですけども、偏差値1というのは多分点数にすると大体2点ぐらい。だから、48だと4点ぐらい、47だと6点ぐらいだと思いますので、大きな差ではないと思いつつも、ちょっと気になるなと感じてます。

ただ、全体としては、それよりも本当に全体として見たら50とか51とか、そういう数字だと思うんですけど、コロナの中で実態は子ども一人一人なんで、そののばらつきの議論というのは、もう最近されてないんですけども、ばらつきが広がってることはないのかなと。先ほど記述式のところで正答率が高いのに無解答率が高いというのは、もしかしたらそういうことが起こっている可能性があるのではないかなと感じました。特に今いろいろところで二極化が進んでいるんで、もう一回そのところは気になるころだと感じてます。

それから、個別に学力を向上しようとしていったときに、どうしても叱ったりとかやらせたりということが増えていくことが好奇心を潰してしまうという、そういう昔ながらのパターンというのがあると思うんで、そこがそうならない、好奇心を育てて基礎の学力を高めるんだ。あるいは、よくやったねと、先ほどのできてなくても、よりよくなれる伝え方というのを工夫がやっぱり必要なのかなと感じました。

あともう一つは、AIの話をされたので、AIが全ていいのかどうかというのは分からないですけども、ICTの利用率の目標、使用する目標が100%を目指してるんですけども、3年間の中で使用するのももちろんとして、どういう使い方、よりよい使い方というのをぜひ目指していただきたいなと感じました。

○市長 ありがとうございます。

よく考えてみると、小数の足し算、引き算で偏差値47というのは、要は基本中の基本、

小学校ですもんね。分かってないということにつながってるところはあり、何かが構造的な問題になっている可能性は高いですよ。

○平井小学校長会長 今までの全国学力・学習状況調査の結果を見ても、四則計算のところできてなかったり、四則計算の順番、足し算を先にするのか、掛け算を先にするのか、そういったところも弱かったということ思い出しています。小数だけでなく、計算全般をもう一回見直して、小数だけでなく、どこが弱いのかというところを見いだした上で取り組む必要があるかなと思います。

○市長 そういう小数の足し算、引き算とかというのは、もうこれからずっと必要なことなんで、そこはきちっと身に付けさせておいてあげないとという感じはいたしますよね。

時間になりましたが、教育長、何か最後あれば。

○教育長 今年度から校長先生方、岡大の先生と分析した結果、例年よりは具体的な議論ができたのかなと思っておりますので、今後ともこれを続けながら、引き続きよろしくお願ひしたいと思います。ありがとうございました。

○市長 じゃあ、私、最後ですが、今日も教育委員の皆さん方のおっしゃったところって、ポイントを突いてるところが私はあるように思います。だから、この総合教育会議は何のためにやってるかという、教育という一つの世界、ある面、クローズドな世界にオープンな風を吹き込むという趣旨であります。教育委員制度自身は前からあったわけですけど、そういったことで始まっているわけなんで、例えば今日の話を確認にそうだよということだけで終わっちゃうと意味がないわけですから、取り入れるところは取り入れて、取り入れないところは取り入れない。教育の世界で、ここはできないということもあっていいと思うんですけども、ぜひ教育長そして教育委員会の皆さん、校長会の皆さん、今日の議論を整理していただいて、次の回にこういうふうにご我々としてはやりたいたいというところをまた教えていただければというように思います。

私からは以上ですが、事務局のほうにマイクをお返ししたいと思います。

○司会 ありがとうございました。

次回の会議は改めて通知させていただきます。

以上で令和5年度第1回総合教育会議を閉会いたします。本日はどうもお疲れさまでございました。

午後4時55分 閉会